

有限会社 染原化工

〒816-0921 福岡県大野城市仲畑1-24-25
TEL 092-591-1892 HP <https://somehara.com/>



公式HP

業 種 包装資材製造
従業員数 32名
資 本 金 300万円



事業内容

長年積み重ねた技術が生む、安心の高品質

1958年創業の印刷会社。食品用を中心とした包装資材の製造を主力事業とし、印刷からドライラミネート加工まで一貫対応が可能。酸素や水蒸気を遮断する高機能フィルムとシール性素材の貼り合わせ技術に強みを持つ。多品種少量生産への柔軟な対応と確かな高品質で数多くの顧客から信頼を得ている。

改善成果のポイント

訪問支援回数 | 3回（支援期間：6カ月）

- デジタルデータ環境整備によるアナログ業務からの脱却
- 今後のさらなるDXに向けた基盤の構築



Q どんな困りごと（課題）がありましたか？

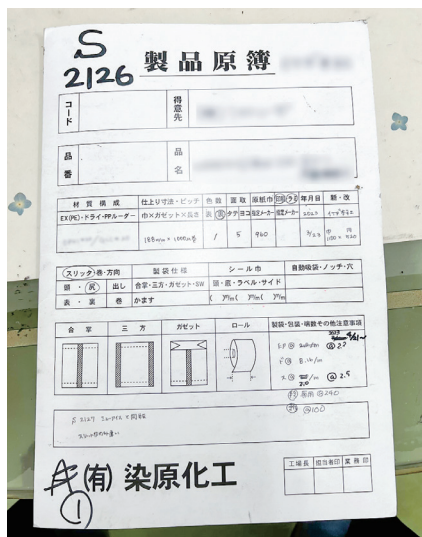
当社が主に製造している食品関連向けの包装資材は、非常に高い品質が求められ、トレーサビリティの確保も欠かせません。にもかかわらず、現場ではトレーサビリティの記録だけでなく、作業指示や在庫管理などあらゆる業務を紙媒体で運用していたため、作業の正確性や効率に大きな影響を与えていました。例えば、書類が今どこにあるのか把握できていなかったり、記入ミスが頻発したりするなどの問題が発生していました。

また、仕様変更や材料の入荷遅れ、不良発生といった情報がリアルタイムで共有されないため、確認や連絡に時間を要して作業が停滞するケースも多く見られていました。他にも、進捗を正確に把握できないことにより後工程が適切なタイミングで準備ができないといった問題や、多品種にわたるインクの在庫管理がうまくいかず、材料不足によって工程が停止し、さらなる時間のロスが生じるといった課題もありました。こうした情報連携の不十分さが、当社にとって大きな課題となっていました。

課題 ③ ④



製造した商品の例



改善前の作業指示書

Q 改善の取組み内容を教えてください

情報がリアルタイムで一元的に管理されず、必要な情報をすぐに確認できないことが、作業効率の低下を招く大きな要因となっていたため、業務の円滑な遂行を目的として、情報のデジタル化に取り組むこととしました。当社は本社工場に加えて、少し離れた場所に第二・第三工場を有しており、各工場に対応可能な工程が異なることから、製品ごとに拠点を移動しながら製造を行っているのですが、今回の取組では、これらの拠点をネットワークで接続するとともに、各工場内にWi-Fi環境を整備し、製造現場にパソコンを設置することで、これまで紙で閲覧していた作業指示書などをデジタルで確認できるようにしました。その際、作業指示などのデータはサーバ上で一元管理し、各工程では製造時の記録を入力することで進捗状況をリアルタイムで把握できる体制を整えました。さらに、材料を管理する倉庫でも入力を可能とし、多品種にわたる在庫の状況を常に把握できるようにしました。



改善前の製造現場

Q 取組んで良くなった点を教えてください

メインの効果
(改善点)

これまでは電話や対面で行っていた情報共有や確認作業の工数を大幅に削減することができました。各工程での入力によりリアルタイムでの情報共有が可能となり、手書きによる記入負担の軽減とともにデータの精度も向上しました。これにより、記録の信頼性が高まり、トレーサビリティの質が向上しました。さらに、材料倉庫では入荷時点で即座にデータを反映できるようになったため、在庫管理の精度も上がり、材料欠品ロスの削減にもつながっています。

副次効果

紙の出力が減ったことで印刷コストや保管スペースの負担が軽減されたほか、紙資料を探す必要がなくなり、無駄な工数を削減することができました。また、不良が発生した際の画像データを簡単に共有できるようになったので、品質向上にもつながっています。

今後の目標

構築したデジタル環境を活用して全従業員が業務を高いレベルで遂行できるよう、標準化を進めていきます。また、今回デジタル化されたデータを有効活用して新たな価値の創出につなげていくほか、新たなデジタルツールの導入にも積極的に取り組んでいきます。



改善後の製造現場



従業員が閲覧・入力している様子

企業様の声

デジタル基盤を構築することで業務の質が向上するという確信はあったのですが、アドバイザーからは、得られる効果を具体的な数値で把握し、投資対効果を明確に示すことの重要性について助言を受けました。また、RPAの活用など、今後のさらなる業務効率化に向けた情報

提供もあり、将来的な改善の方向性や可能性について、より具体的なイメージを持つことができました。

有限会社 染原化工
代表取締役社長

森 一敏 様

生産性アドバイザーから一言

これまでのアナログな業務の進め方に強い危機感を抱かれた社長が、自ら先頭に立ってプロジェクトを力強く牽引し、全社的にデジタル基盤を浸透させることで、大きな成果を上げられました。新たな情報の吸収にも非常に前向きで、今後さらなるIT化・DXを積極的に推進し、より大きな業務改革と経営力向上を実現されるものと確信しています。

生産性アドバイザー

大山 昇